

いつも私のコラムをお読み頂きまして有難うございます。

この新聞が発刊される頃には、今年入社した新入社員も配属が決まり各店で接客させて頂いていると思います。まだまだ至らぬ点が多々あるかと思いますがよろしくお願い致します。



この時期になると私も自分自身が美容学校を卒業して美容室に就職した頃の事を思い出します、33年前の話ですが(笑)。

現在美容学校は2年制で入社してくる時は20歳になっているのですが、私の頃は1年制だったので19歳で就職しました。私が最初に就職した店は大阪の下町のお店で2階建ての長屋の1階が美容室で2階が男子寮となっており私はそちらに引越して仕事をする事となりいわゆる住み込みでの修行が始まったのです。寮と言ってもボロボロの長屋の2階、細くて薄暗く踏み込めばぎいぎい音が鳴るような階段を上がると6畳の二間続きの和室に先輩方と4人で暮らすという生活、プライベートもクソもありません、僕に与えられたのはそのうちの一部屋の半分、つまり3畳だけでした。ただ下が店だけに朝の弱かった私にとっては遅刻の心配はなかったのですが…

お風呂はないので近くの銭湯に行くのですが本当にもう凄いとこで風呂場には身体中紋々の入ったおっちゃんが、当たり前のようにいっぱいいらっしゃるのです。

ある日、お風呂の帰りに先輩からちよつとどんでも食って帰ろうと近くのうどん屋に立ち寄ったのですがここがまた凄い。「はいお待ち」とおばちゃんがうどんを運んできてくれる時、爪の間に垢がいっぱい溜まったおばちゃんの指がうどんの汁にどっぷり浸かっているじゃありませんか、おまけに食べ始めたら上からばらばらと何か落ちてくるのでふと頭上を見てみると扇風機に巻き込まれて死骸となった蚊が私のうどんにばらばらとふりかけのように落ちてくる始末、どちらかと言うと潔癖の私にとっては耐え難い毎日の始まりでした。

あの頃は丁稚奉公とまでは言わなくともいわゆる徒弟制度みたいなものはまだ少し残っていた時代で今では考えられないですが、先生(オーナー)のご自宅やお車をスタッフ皆で休みの日に掃除したりしていました。ある日、お店で仕事をしていると先生から私だけ呼び出されお宅に行くとか何やら急に大事な用事で出来たのかいきなり「洗車しなさい」と言いつけられました。さすがにムカッとした私でしたが先生の命令なので仕方なくゴシゴシ洗車を始めたのですが段々カムカしてきて「このタイヤのひとつくらいは俺が働いた金やる、ボケ！」とぼやきつつタイヤを蹴飛ばしてやったら徐に後ろから「何か言ったかね?岩崎君と先生。

「なっ、なにもありません。(>\_<)」